

看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告（第二報） －基礎看護学におけるルーブリック評価の試み－

須藤 聖子¹⁾, 林 有学¹⁾, 小林 智子¹⁾, 中西 恵理¹⁾, 宮崎 誠²⁾

¹⁾ 畿央大学健康科学部看護医療学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

²⁾ 畿央大学教育学習基盤センター（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

E-Portfolio practice report of nursing education (2nd Report) －Introduction of rubric evaluation in the field of fundamental nursing－

Seiko SUDO, Yuhak IM, Tomoko KOBAYASHI, Eri NAKANISHI,
Makoto MIYAZAKI

1) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University
(4-2-2, Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

2) Center for Teaching, Learning and Technology, Kio University
(4-2-2, Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

I. 背景

近年の看護学生の特徴として、看護が目的でない学生の増加、読み書きや理解力の低下、主体的な学習態度に欠ける¹⁾といった特徴が指摘されている。本学看護医療学科に入学してくる学生も同じような傾向がみられ、受動的な学習スタイルから脱却し、主体的な学習を促すための授業設計が重要であると考えられる。

このような近年の看護学生の特徴をふまえて、基礎看護学では、2012年度から学生の論理的思考力を育てるため、記録の指導にとりくんできた²⁾。2014年度入学生からは、パーソナルコンピューター（以下PCとする）が無償で貸与され、授業支援型eラーニングシステム（以下CEASとする）が運用されるようになり、紙ベースの演習記録をスキャンデータとしてデジタル化（以下PDF化とする）し蓄積するeポートフォリオを始めた。これにより、学生自身に記録物のファイリングを任せていた方法から、記録物を教員と共有して個別指導に活用できるようになった。また、2016年度からは、学生自身で記録物をPDF化して蓄積してもらい、学習の振り返りに活かすように促した。しかし、これらは記録物をPDF化して蓄積するだけに留まり、学生自身による学修目標の到達度評価には至っていなかった。2017年度後期からは、教育学習基盤センター教職員の協力を得て、eポートフォリオシステムに学生の成長プロセスを客観的に評価するルーブリックを導入し、授業を実践した。ルーブリックとは、いくつかの評価項目（観点）について、学習成果として観察できる作品やパフォーマンスなどの特徴を段階的に提示し

た評価基準³⁾であり、客観的に測定しにくい思考や判断などの学習成果を確認するためのツールとして注目されている。

そこで、今回、学生の主体的な学習を促すための授業設計および評価を実践し、ルーブリックを授業に導入することにより、学生自身で自己の学修到達度を振り返り、学習成果を可視化することができた。

本稿では、基礎看護学におけるルーブリック評価の試みについて、実践内容とその成果を報告する。

II. 科目の構成

基礎看護学は専門分野Iに位置づけられており、本学の基礎看護学の科目構成は次のとおりである。

1. 1年次

1) 前期

看護技術基礎論：看護に共通する基本技術を学ぶ。

2) 後期

療養生活援助技術：療養生活を支える援助技術を学ぶ。

フィジカルアセスメント：対象者の身体を観察し情報収集のための技術を学ぶ。

基礎看護学実習：1年次で学んだ知識と技術を統合して実際の対象者に必要な看護援助を実践する。

2. 2年次

1) 前期

診療過程援助技術：健康上の問題がある対象者の診療・治療過程に伴う援助技術を学ぶ。

看護過程基礎論：看護実践を導き出すための思考過程について学ぶ。

Ⅲ. 方法

1. 授業ルーブリックの作成

各科目の授業のルーブリック（以下授業ルーブリックとする）を作成するにあたり、まず、シラバス、学修内容を見直し授業の学修目標から、各回の授業で身につけてほしいコンピテンシーを抽出した。次に、抽出したコンピテンシーを学士課程におけるコア・コンピテンシーと卒業時の到達目標および教育内容(例)⁴⁾を参考に、教育内容を評価項目の観点として示し、授業ルーブリックを作成した。同時に学修目標に看護医療学科のディプロマ・ポリシー（以下DPとする）を対応づけて学修内容とDPとの関連性がわかるように作成した。看護技術基礎論と看護過程基礎論の授業ルーブリックの一部抜粋を表1,2に示す。（表1,2）

授業ルーブリックの評価基準は、「S：Super（期待する思考活動以上に何かプラス *a* が見られる）；遙かに発展的」「A：十分満足できる（期待する思考活動が十分見られる）；充分達成」「B：概ね満足できる（期待する思考活動は見られるが未到達な部分もある）；おおむね達成」「C：努力を要する（期待する思考活動が見られない）」の4段階で提示した。それぞれの段階に対応する思考やパフォーマンスの特徴を示した記述語は、「・・・できる」「・・・できない」で学生が自己評価しやすい簡単な文章を表現した。例えば、「看護技術基礎論」の環境のアセスメントでは、「A：十分満足できる；充分達成」に【環境と人間の関係が3つ説明できる】の到達目標をあげ、「S：Super；遙かに発展的」を【環境と人間の関係が論理的に3つ説明できる】、「B：概ね満足できる；おおむね達成」を【環境と人間の関係について2つ説明できる】、「C：努力を要する」を【環境と人間の関係について説明できない】と学生が自己評価しやすいように段階的に明示した。

また、技術確認が必要な学習内容は、インストラクショナルデザインの考え方を取り入れ、これまで教員だけが把握していた評価指標を学生に提示し、学生の自己練習での自己評価指標として活用できるようにした。

2. 実施期間と対象

- 1) 実施期間：2017年4月～2018年8月
- 2) 対象：看護医療学科のうち以下の科目を履修した学生

- ①2018「看護技術基礎論」履修生95人
- ②2018「看護過程基礎論」履修生102人
- ③2017「療養生活援助技術」履修生104人
- ④2017「フィジカルアセスメント」履修生108人

3. 倫理的配慮

対象には、ルーブリック評価の趣旨を科目担当以外の教員が書面と口頭で説明した。学生が評価したものをデータとして分析すること、データの提供は本人の自由意思であり、提供の可否が成績には関係しないこと、途中辞退も可能であること、個人情報保護と匿名性の確保について説明した。

また、本稿の投稿に関しては、対象に学会誌等に掲載することの同意を得た。

4. 授業ルーブリックの実際

初回のガイダンス時に各科目の学修のキーワードと到達目標・評価法を示した授業計画を配付し、評価法として演習記録、論述レポート、演習でのパフォーマンス、技術チェックリスト、自己評価表を説明し、記録物はPDF化するように説明した。

授業ルーブリックの説明は、2017年度後期は、授業の中盤（11月中旬）と最終日（2月初旬）、2018年度前

表1 『看護技術基礎論』ルーブリック評価基準（一部）

学士力	ディプロマ・ポリシー	教育内容 (キーワード)	S:遙かに発展的	A:充分達成	B:おおむね達成	C:努力を要する
知識・理解	看護医療分野に関する高い専門性と臨地に役立つ実践力を修得している。	環境のアセスメント	環境と人間の関係が論理的に3つ説明できる。 看護における環境調整の意義・視点が論理的に説明できる。	環境と人間の関係が3つ説明できる。 看護における環境調整の3つの視点が説明できる。	環境と人間の関係について2つ説明できる。 看護における環境調整の2つの視点が説明できる。	環境と人間の関係について説明できない。 看護における環境調整の視点が説明できない。

表2 『看護過程基礎論』ルーブリック評価基準（一部）

学士力	ディプロマ・ポリシー	教育内容 (キーワード)	S:遙かに発展的	A:充分達成	B:おおむね達成	C:努力を要する
態度・志向性	チーム医療や高度医療、地域の訪問看護などの場面で、様々な医療関係者と円滑なコミュニケーションを図り協働し、リーダーシップを発揮できる。	グループ活動	グループ活動が円滑に進むようリーダーシップを発揮しグループメンバーと協働できる。	グループ活動が円滑に進むようにグループメンバーと積極的にコミュニケーションがとれる。	グループ活動に参加することができる。	グループ活動に参加することができない。

期は、授業の最終日（7月下旬）に評価するよう、科目主催者の強制力が働かないように、科目主催者以外の教員が行った。学生には授業ルーブリックの目的として①ルーブリックの評価基準を使って自分の学修到達度を自己評価することで学びを深める機会を作る、②自己評価を集計して授業改善に役立てる、ことを説明した。また、実施の手順書を配付して具体的なCEASの操作方法を資料1のとおり説明した。

学生は、自分のPCからCEASの授業科目の共通ページに設けた授業ルーブリックにアクセスし、表示されたリストの教育内容を選択し、4段階の各達成度を選択して自己評価を行い、根拠となるファイル類を登録、自己評価が妥当である理由や今後の課題についてコメントを記入し保存した。

学生の自己評価は、「S：Super；遥かに発展的」を4、

「A：十分満足できる；充分達成」を3、「B：概ね満足できる；おおむね達成」を2、「C：努力を要する」を1として点数化し、各教育内容の平均値をみた。

IV. 結果

授業ルーブリックの導入は、2017年度から始め2018年度は2年目にあたる。初年度は、「療養生活援助技術」「フィジカルアセスメント」の2科目で実施し、2018年度前期は、「看護技術基礎論」と「看護過程基礎論」の2科目で実施した。

今回は、「看護技術基礎論」と「看護過程基礎論」の結果について述べる。

1. 授業ルーブリックによる自己評価

1) 「看護技術基礎論」

ルーブリックの評価平均値とそのレーダーチャー

資料1 授業ルーブリック説明文（例）

療養生活援助技術（2018年度）ルーブリック

ルーブリック（自己評価用の学習評価指標）を使ってこれまでに学んだことを振り返ってみましょう。

ルーブリックの No.1 を完成させてください。

1. リンクをクリックするとレーダーチャート、折れ線グラフ、ルーブリック（表になっているもの）が表示されます。
2. ルーブリックの「編集」をクリックして、各項目の学習目標に対して自己評価（4段階）して、振り返りを実施してください。
 - ・達成度の「未達成」「ほぼ達成」「達成」「高度」から選択する
 - ・自己評価した根拠や証拠となるファイルをアップロードする
 - ・コメント欄に自己評価した根拠や学んだことでできるようになったこと、まだできていないこと、今後どうすればよいかなどの振り返りを記述する。

作成する際は、以下の点に注意してください。

- ・自己評価が高い、低い成績に加味しませんので率直に自己評価してください。
- ・証拠となる添付ファイルは、的外れでないものをできるだけたくさん掲載してください。
- ・ファイルは、この授業以外のものであっても構いません。
- ・紙のレポートなどは PDF にスキャンして添付してください。
- ・ボランティアなどの課外活動は、様子がわかる写真などを添付してください。
- ・コメントには、自己評価の根拠の他、到達目標についていろんな観点から学習したことについての気づきや振り返ってみてください。

トを図1に示す。授業ルーブリックを使って自己評価した学生は、95人中、91人（95.8%）であった。「看護技術基礎論」のDP該当は、1,4,8であり、全体の平均値は2.58（SD±0.40）であった。「人的・物理的環境調整技術」は、2.82（SD±0.47）と高かったが、「EBN（根拠のある看護）」は、2.34（SD±0.66）と低かった。自己評価内容は、自己評価が妥当である理由や今後の課題について詳細に記入している学生もいたが、「できた」「できなかった」に留まり、理由や課題を記入していないなど学生によって相違があった。

資料2に学生の自己評価例を紹介する。「看護の独自性」「人体の身体の仕組みと働き」「自己理解と援助的関係の形成」「看護記録」は、3（充分達成）と評価し、「身体への看護援助技術」「EBN（根拠の

ある看護）」「環境のアセスメント」「人的・物理的環境調整技術」「自己研鑽」は、2（おおむね達成）と評価していた。「環境のアセスメント」に対するコメントでは、講義を通して環境と人間との関係、環境の3つの視点で学んだことから、環境が与える影響要因を最小限にすることで患者の安楽性につながることを学んでいた。また、患者のベッド周辺の環境を整える技術については、不十分であることに気づいており、今後の実践に活かそうとしていることが具体的に考えられていた。このように、学生が自分の学習を振り返り、教育内容の何ができて何ができなかったのかを具体的に記入し、今後の課題を明確にすることができた。

2) 「看護過程基礎論」

ルーブリックの評価平均値とそのレーダーチャート

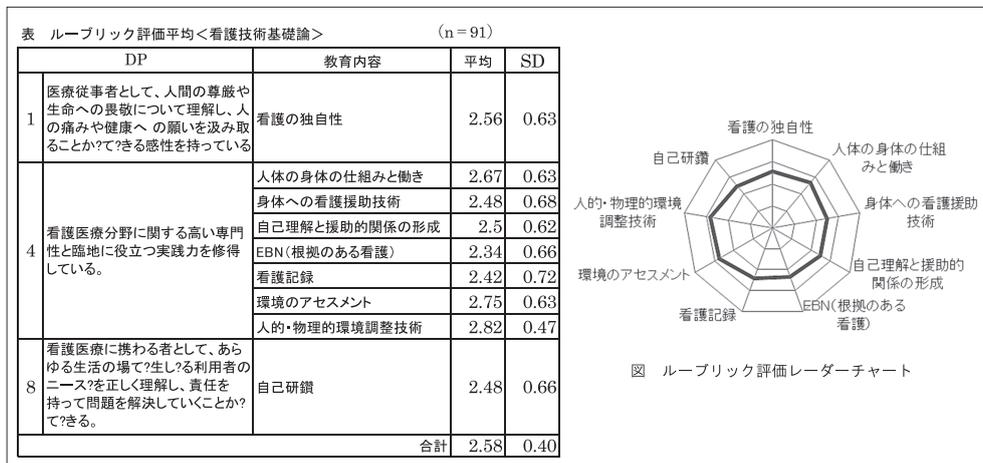
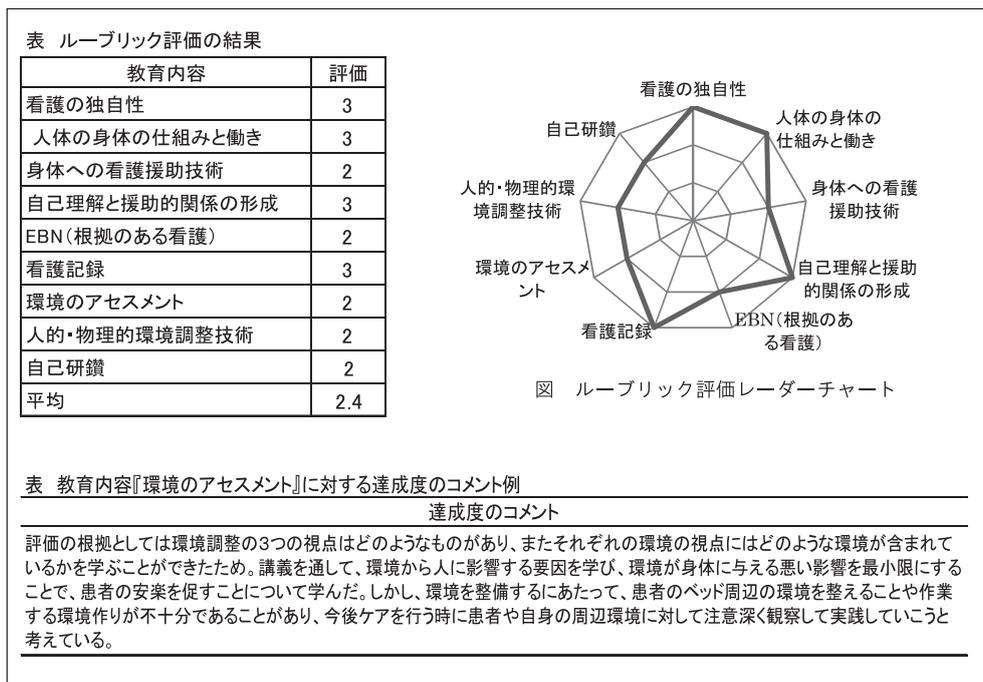


図1 「看護技術基礎論」ルーブリック評価の平均

資料2 「看護技術基礎論」学生の自己評価



トを図2に示す。授業ルーブリックを使って自己評価した学生は、102人中、全員（100%）であった。「看護過程基礎論」のDP該当は、1,2,4,5,8であり、全体の平均値は2.73（SD±0.42）であった。「グループ活動」は、2.91（SD±0.62）と高く、「看護実践の評価」が2.62（SD±0.58）と低かった。自己評価内容は、自己評価が妥当である理由や今後の課題について詳細に記入している学生もいれば、「できた」「できなかった」に留まり、理由や課題を記入しないまま、高い評価を選択している学生も見られた。

資料3に学生の自己評価例を紹介する。「看護計画」は、4（遥かに発展的）と評価し最も高かった。「グループ活動」「アセスメント」「グループ討議」は3（充分達成）と評価し、「援助の実施」「看護問題の抽出」「看護実践の評価」は2（おおむね達成）と評価して

いた。「看護目標」は1と最も低く評価していた。「グループ活動」に対するコメントからは、グループワークに積極的に参加して自分から発言することを意識し、グループワークをスムーズに行うための具体策を考えて行動した様子が伺えた。また、自分が苦手なことができなかったことから、今後の対策を考えることができていた。このように学生は、グループ活動に意欲的に取り組もうと努力したこと、自分に不足していることを振り返っていた。

V. 考察

1. 授業ルーブリックによる自己評価の特徴

1) 看護技術基礎論

看護技術基礎論の自己評価平均値は、2.58であったことから、教員が身につけてほしい教育内容の9

DP	教育内容	平均	SD
1	医療従事者として、人間の尊厳や生命への畏敬について理解し、人の痛みや健康への願いを汲み取ることができる感性を持っている。	2.78	0.56
2	チーム医療や高度医療、地域の訪問看護などの場面で、様々な医療関係者と円滑なコミュニケーションを図り協働し、リーダーシップを発揮できる。	2.91	0.62
4	看護医療分野に関する高い専門性と臨地に役立つ実践力を修得している。	2.64	0.61
5	保健・医療・福祉の各分野の専門家との連携・協働の土台となるプレゼンテーションスキルを身につけている。	2.71	0.74
8	看護医療に携わる者として、あらゆる生活の場で生じる利用者のニーズを正しく理解し、責任を持って問題を解決していくことができる。	2.69	0.66
	看護目標	2.76	0.69
	看護実践の評価	2.62	0.58
	合計	2.73	0.42

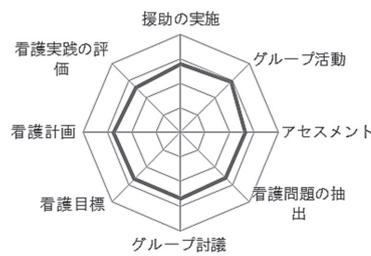


図 ルーブリック評価レーダーチャート

図2 『看護過程基礎論』ルーブリック評価の平均

資料3 『看護過程基礎論』学生の自己評価

教育内容	評価
援助の実施	2
グループ活動	3
アセスメント	3
看護問題の抽出	2
グループ討議	3
看護目標	1
看護計画	4
看護実践の評価	2
平均	2.5

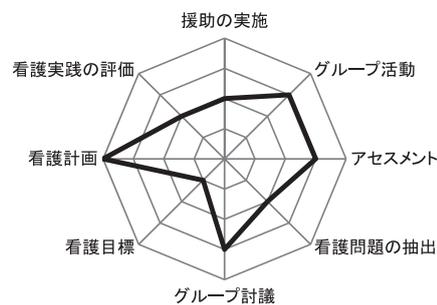


図 ルーブリック評価レーダーチャート

表 教育内容『グループ活動』に対する達成度のコメント例

達成度のコメント

今回のグループワークでは全ての集まりに参加することができた。また自分がわかることは積極的に発言し、自分の意見をメンバーに根拠をつけながら伝えることを意識して行った。グループメンバーの意見に対してなるべく否定的な意見は出さないようにし、「それもいいけど、これを付け足したほうがいいと思う」などとグループワークを潤滑に行えるような意見の出し方を意識した。私はリーダーシップをとることが苦手なのでグループをまとめることはできなかったが、次回からはできるだけグループ皆の意見をまとめるように、皆が言っていることを覚えておく、などの対策を立てていきたい。

項目において、努力を要する部分と、概ね達成したが未達成部分もあると学生は自己評価していると考えられる。「EBN（根拠のある看護）」が2.34と低かったのは、1年次の学生にとって自分の言葉で説明できるだけの看護実践経験がなく、評価が困難であったことが考えられる。また、「EBN（根拠のある看護）」に示した記述語が妥当かどうかを再検討する必要があると考える。一方、「人的・物理的環境調整技術」が2.82と高かったのは、環境を調整する技術の演習で物理的環境測定を行い、対象者にとって快適な療養環境を考えながらベッドメイキングを実施したことから、評価しやすかったと考えられる。また、ベッドメイキングの技術確認前に評価指標を学生に提示し、自己練習時に自己評価指標として活用できるようにしたことで、到達目標を意識して練習に取り組むことができ、評価しやすかったと考える。

2) 看護過程基礎論

看護過程基礎論の自己評価平均値は、2.73であった。教員が身につけてほしい教育内容の8項目において、努力を要する部分はあるが概ね達成できたと自己評価していると考えられる。評価が高かった「グループ活動」は、本科目では演習において紙面上の事例患者を用いてグループワークを行っており、学習活動として学生自身が努力した内容であったと考える。評価が低かった「看護実践の評価」「看護問題の抽出」「アセスメント」は、知的な作業であり、既習の知識を統合させて論理的に記述することを求められる内容となる。そのため、学生にとっては難しく感じ、評価が低くなったと考える。

今回の「看護技術基礎論」「看護過程基礎論」の学生の評価および記述内容から、学生は達成状況を学んだ内容や自己の行動を示しながら振り返り、課題を述べていた。これまでの教授活動では、学生は定期試験や技術試験で学修到達度を評価される受動的な立場にあったが、ループリック評価を用いることで、教員が示すだけの学修目標から、学生自身が自己評価の指標として用いる到達目標として提示でき、学修目標に基づいて学生自身が自分の学びを振り返る機会になったと考える。また、学生自身が何を学べて何が学べていないのかを可視化できるという点で有効であったと考える。糸賀ら⁵⁾は、初めに「どこへ向かっているのか?」「単元の目標、評価方法、評価規準（基準）など」を、単元の最初に学習者に理解させる重要性」を指摘しており、このことは、授業の初めに今後の見通しを与えることでその後に取り組むべき課題に向けて学習を進めることができると考える。

しかし、学生の自己評価には、できたと評価しているが、その理由の記述がなく、4（遥かに発展的）と高い評価を選択している学生も見られ、自己評価には個人差があることから、正確に自己評価ができているかどうかは疑問である。安原ら⁶⁾は、卒業研究のパフォーマンス評価としてループリックを作成した結果、「学生の中にはRubricの記述語が表すパフォーマンスを意識したふるまいがみられ、意欲のある学生には具体的な目標を立て易くなったと思われる。一方で・・・（中略）意欲のもてない学生に模範解答を与えたことになる可能性があり、彼らの擬装を見抜く評価者側の質が問われる」ことを指摘している。このように、学生自身に自己評価する機会を与えた場合、的確に自己評価をする力が必要となる。教員は、学生がどのような評価点をつけたかを問うのではなく、学生がどのような理由（根拠）で評価しているのか、に視点をあて、学生自身が的確に自己評価する力をどのように育てるか、を考えて指導することが重要であると考えられる。そのためには、学生が自分自身をどのように評価しているかを可視化することで自分を評価することに自覚をもたせることが重要であり、その上で学生の個別性に応じた関わりをすることによって、自己評価能力を育てることにつながると思われる。

今回、基礎看護学における2科目で授業ループリックを取り入れたことで、学修目標および授業（講義・演習）内容を再確認できた。

以上の試みを、鈴木ら⁷⁾のインストラクショナルデザインの目指す学びに必須と考えられている「効果」「効率」「魅力」に沿って考えてみる。「効果」は、学びにおける期待を指し、学習者がある一定の成果を出すことで「効果」になる。授業を実施した結果、学生が内容を理解し、目標が達成されれば「効果」になると考える。「効率」は、学びの場を提供する人とそれを受ける側の両方の立場から考えることができ、時間的にも物理的にも無駄や手間をかけないで求められる成果を得ようと考えれば、技術評価をする際の準備として、事前に学生に評価指標を示した自己評価表を配付したことが効率的であったと考える。また、その自己評価表は再利用できるため、繰り返し活用することができると思われる。

しかし、効果的で効率的であっても学生にやらされ感や義務感を感じさせることなく、学生自身がやってみたい、やろうという思いを起こさせ、それが内発的動機づけとなり、達成感や充実感を実感してもらうためには、「魅力」的であることが重要であると考えられる。したがって、今後もこの「効果」「効

率」「魅力」の3つの視点を確認しながら学習を支援していく必要があると考える。

インストラクショナルデザインの基本形として、学習方法・評価方法・教育内容のバランスを保つ⁸⁾ことが言われており、そのためには、学生に何を学んでほしいのか(学習目標)、学んだかどうかをどのように判断するのか(評価方法)、そして、学びをどのように助けるのか(教育内容・方法)の3つを確認しながら、学生の実態をふまえた上で教育活動を改善することが必要であると考えます。

VI. 結語

今回、eポートフォリオ学習の実践として基礎看護学の「看護技術基礎論」と「看護過程基礎論」の2科目においてルーブリック評価を試みた結果、以下のことが得られた。

1. ルーブリック評価を授業に導入することにより、学生が自己の学修到達度を振り返りながら自己評価ができ、学習成果を可視化することができた。
2. 学習成果を可視化するためには、自分自身を評価することに自覚をもたせることが重要であり、自己評価能力を育てるには、学生の個別性に応じた関わりが必要である。
3. 学生が活用できる自己評価指標として到達目標を提示することで自分の学びを振り返る機会となり、学びを可視化できるという点で有効であった。また、フィードバックで評価指標を学生と共有することで学生の理解を促すことができた。
4. 授業ルーブリックを取り入れたことで、教員間で学修目標および授業(講義・演習)内容を再確認できた。

VII. 謝辞

本稿をまとめるにあたり、協力して下さった看護医療学科の学生の皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、畿央大学平成28年度教育改革事業の助成を受けたものです。

註

1. 「学修目標」は、授業時間や単位制度の関わりのもとで使用される概念であるため、本稿では単位制度としての到達目標として用いた。
2. 「学習」は、学生自身が学ぶ行動として捉え、単位制度の関わりのもとで使用される「学修」とは区別して用いた。

VIII. 文献

- 1) 安ヶ平伸枝ら：基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫, 聖路加看護学会誌, 1(14), No.2, 46-53, 2010.
- 2) 須藤聖子ら：看護学生の論理的思考力を育てる基礎看護学領域のとりくみ, 畿央大学紀要, 13(2), 63-72, 2016.
- 3) 鈴木克明監修：インストラクショナルデザインの道具箱101 初版, 160, 北大路書房, 2016.
- 4) 日本看護系大学協議会「看護学教育評価検討委員会」：学士課程におけるコア・コンピテンシーと卒業時の到達目標および教育内容(例), 47-56, 2016.
- 5) 糸賀暢子ら：看護教育のためのパフォーマンス評価 ルーブリック作成からカリキュラム設計へ 第1版, 2017, 医学書院.
- 6) 安原智久ら：パフォーマンス評価を志向して修正版グランディット・セオリー・アプローチによる卒業研究の概念抽出とRubric作成, 135(1), 99-105, YAKUGAKU ZASSHI (薬学雑誌), 2015.
- 7) 前掲3), p2.
- 8) 前掲3), p3.
- 9) 文部科学省ホームページ：学習評価に関する資料-学習評価に関する基本的な考え方, 法令等の規定学習評価に関する資料
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/03/23/1367581_5.pdf (2018.9.26閲覧)
- 10) 稲垣忠編：授業設計マニュアルVer.2-教師のためのインストラクショナルデザイン-, 北大路書房, 2015.

